

原念斎と「先哲叢談」稿本

高橋, 昌彦

<https://doi.org/10.15017/4755970>

出版情報 : 雅俗. 3, pp.148-166, 1996-01-10. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :

原念齋と『先哲叢談』稿本

高橋昌彦

『先哲叢談』は、木版での書肆を替えての多くの後印本から、明治以降の活版——明治二十五年初版松榮堂発行本をその代表として、近年の労作平凡社東洋文庫本に至るまで、繰り返し梓行されている。中には、新釈国漢文叢書（湯川弘文社、昭和七年刊）のように、受験参考書の一冊として、読方・語釈・通釈・注意註を施し、出版されたものもある。

だが、それほどに、有名な著述でありながら、その著者原念齋について、あるいは、本の成立について、どれほど知られているだろうか。例えば、

○日本儒林談

原念祖齋の先哲叢談、広く世に行はれつれど、其初め幾度か稿を改めしものにて、予がもてる稿本には、日本儒林談とあり、三十年の昔し下谷の芸香堂の先代より得たるなり、全部にはあらで、僅に首めのかた三巻ばかりあり、これを刊行の先哲叢談に比するに、順序も異り、記事は予め障り無きやうに取捨したりと見ゆ。……

〔本之話〕・『三村竹清集 一』註

と三村竹清氏によって、早くから稿本の存在が指摘されている。今日、この竹清旧蔵本は天理図書館に所蔵されているが、竹清氏のこの記事を引いたものも、その内容に言及した論も知らない。且つ、『日本儒林談』は東京大学にも所蔵が確認されているが、同じく紹介されていないようだ。一方、著者原念齋については、朝川善庵や佐藤一斎の撰した墓誌碑文を使つての伝がほとんどである。

『先哲叢談』という著述は、伝記研究にとって大変貴重な資料であるため、本文考証されることなく、無批判に引用され

る機会が多いとの反省に立って、本誌でも「先哲叢談聚議」を連載している。時を同じくして、同じ立場から前掲の東洋文庫『先哲叢談』が出版された。しかし、これらが、研究の端緒に過ぎないことは言うまでもあるまい。本稿は、今まで触れられる機会の少なかった原念齋という人物と、彼の代表的著述である『先哲叢談』の稿本を追いかけていくものである。

一

原念齋の養嗣子原徳齋^作の著述に『先哲像傳』がある。版本は弘化元年（一八四四）刊、四巻四冊で二十人の儒者の肖像と評伝が載っている。この版本に、念齋は未所収であるが、写本『先哲像傳』（国立国会図書館蔵、七冊）三には、善庵・一齋の両碑銘の他に、念齋の瘦せて繊細な雰囲気を与える肖像と和文の評伝が記されている。そして、その内容は、碑文と重なる部分もあるが、より念齋の人となりを詳しく述べている所も見える。少々長くなるが紹介してみたい。尚、句読点は、読みの便を考え、筆者が付したものである。

念齋君、姓は原、名は善胤、字公道、一字伯慶、通称三右衛門と云、念祖齋と号す。義不肖の義父なり。原虎胤より九代に当れり。祖父双桂先生は古河土井侯の教授なり。考敬仲君の時幕府に仕へて歩兵士となる。念齋君安永三年六月廿九日下谷に生れ、幼より志ありて家学を再興せんと欲す。当時山本北山の学頗る家祖の意に彷彿せるをもて、遂に其門に遊ぶ。然れとも志は専ら家学を講窮して名利を逐はず。ゆへをもて交を廣くするを好まず、たゞ四五輩の益友に往來し、また古人の前言往行を景仰して自踐を勤む。歩兵隊の職たるや、祈寒暑雨間暇少しといへとも、遂に看書に倦事なし。こゝをもて著ところの書教部あり。委しきことは碑記等にあり。後文政三年三月十九日卒す、享年四十七歳。駒込吉祥寺中洞泉寺に葬る。

○先君子の德行詳らかに云はゞ、しらする者は諛墓の謗りを成さん。さはいへ言はされは、先人の美を掩ふに似たり。よつて余人の例にならひて一忒条をここに挙るのみ。先子幼より親に事る孝あり。長して専ら祖の学を世に知らしめん

とするを任として、その遺稿を校刻せるに、常に衣食を縮節して資を積みては、これか用に充つ。寛政六年瑤祖遺稿・温泉考を上木し世に布く、文化七年双桂集五卷上木し、同十四年桂館野乗・同漫筆合一卷刻行す。また文政二年過庭紀談五卷や、校畢りて上木を謀ると雖も、果さずして没す。故をもて義不肖といへども、天保五年上木して、其志を繼ぐ。これはつかに其祖に報するの厚志なり。また、常に念祖の二大字を座右に置く終身の警語とす。山本北山これを書す。天沼恒庵これは記を撰す。^{注5}その語、詩の無念再祖筆修其徳に取るなり。

○先子の人となり厳謹周密軽しく笑はず。また軽しく言はず。其物に遇す、必ず條理あり。朋友同僚みな憚るに至る。或時、当直の夜半同僚集りて、世上の雑談に時を移して寝ねず。先子とく枕に就て聞さるをなして居たりしに、いよ／＼盛りに物語しつるを聞いて、やかて艶然として起き、厲声して云、君等榮浮談として何の益かある。とく寝て夜気を養ふへし。当直は花柳場裏にあらず。と誠めしよし、同僚の話なり。

○先子著書数部あり。内先哲叢談儒家部すてに世に布。なを統編稿を具して家にありしに、両回の祝融の災に半は奪る。幸にして残る物、史氏備考百卷・先哲生卒表一卷・許我志三卷・賢相野史五卷・鶴城史翰二卷・念齋漫録二十卷・念齋遺稿五卷あり。書肆の求めに従ひ、校訂して授るものは、先民伝二卷・近聞偶筆^{注6}あり。先哲叢談は、幕府に献本して白銀を賜る。此書世に流伝して、人これを賞す。豊後の広瀬淡窓、読先哲叢談古詩中に、善哉原三筆 無党亦無偏 董狐今不見 原也或幾焉の句あり(遠思樓詩鈔^{注7})。また吾邦のみならず、清国に及ひしなり。近年舶来す海外新書に其よし見えたり。すてに徂來の伝末に記し侍れとも、また先君子のほまれなれば、重複なからも此に載す。其海外新書は、道光十六年秀水鄭照の著なり。其書に云有り。

右梅溪先生所撰物茂卿小伝一篇。是拠日本原善公道所著先哲叢談。為之損益成文。非先生臆説也。因附刻于弁道弁名之前。所謂誦其詩讀其書。不知其人可乎。後之賢者幸諒之。秀水鄭照識。

とあり。嗚呼先子の芳名、吾邦に朽さるのみか、遠く異国に伝播す。また榮ならずや。また其書によりて先哲の偉行を尊崇せしむるに至り、吾文国の先輝を示す。豈寸志といはざるへけんや。

○先子の墓誌碑文は、朝川善庵・佐藤一斎両先生の撰なり。遺命によりて、不肖義の請うくるなり。ともに此に記す。擇処仁とあるは不肖の前名なり。

以下、朝川善庵撰「原君公道墓誌銘」と佐藤一斎撰「原公道墓銘」が続く。

念齋は、その一生の大半を彼の祖父原双桂の著述の校訂、出版に費やしたといつてもいい。念齋の別号「念祖齋」は、將に祖を念う気持ちが一層強かったことの顯れである。そんな念齋が、「孝」の徳目を中心に据えた山本北山に師事したのは、双桂の立場が、後の折衷学と呼ばれる人々のさきがけであったことと相俟つて当然のことであつたしれない。念齋自身の交遊範囲は、極めて狭い。前掲文中の当直の逸話のようでは、無理もなからう。『念祖齋遺稿』を見ても北山門の限られた数人以外に頻出するのは、双桂門下の恩田鶴城ぐらいである。現実の交友よりも、史上の交友を好んだのかもしれない。祖父を思う念齋が、双桂と交流のあつた人物や思想に影響を与えた人物に、その探究の手を広げていったのは自然なことであつたらう。双桂の著述の校訂を進めていた念齋は、祖父の学問を書物の中から知つていった。『桂館野乘』は明君忠臣義士勇者の史伝を、『桂館漫筆』は先儒に対する批評・雑考を語っている。また、同著と同じ内容でより多くの情報を残している『拾遺雜著』(『雙桂集』卷之六所収)は、双桂の割記や故紙の中から、念齋が編輯したもの。紙上の双桂こそが、念齋にとつての師であり、双桂の方法こそが、念齋の目指すべき方向を示唆していったのだろう。『桂館野乘』からは、正史に遺すに足る人物の事跡を伝える術を、『桂館漫筆』からは、先儒の思想を識見する態度を、念齋は身につけていったと言えるだろう。そして、この結果が、先賢の伝を残そうという行為になり、墓誌碑銘を集めた『史氏備考』等へつながると考えることができるのである。

二

『史氏備考』が、『先哲叢談』編集のための基礎資料集であることは、念齋自身「先哲叢談凡例」で述べている。しかし、

直接にこの二書を結びつけることはできない。墓誌以外から採った記述や文章の省略・補足等の推敲の跡、二書の間には、当然何種かの稿本が介在せねばならないのである。そして、その一つが、『日本儒林談』なのである。現在、この書名を持つのは、先にも触れたように東大本と天理本の二種。天理本は、念齋自筆とされる。確かに念齋校録『双桂集』の文字とその筆跡は同じであり、何よりも本人でなければ、ここまで手を入れないだろうと思われる程、同筆の書き入れが激しいのである。

まずは、東京大学図書館蔵『日本儒林談』について、見ていく。天理本とは、明らかに筆迹が違う。写本、大本二巻二冊。外題「日本儒林傳」、内題「日本儒林談」、著者「下総 原善公道著」。内容は以下の通りであり、()内の数字はその人物の条数を表す。

- 卷乾 藤原惺窩(11) 林羅山(5) 林信篤(2) 石川丈山(10) 吉田素庵(2) 中江藤樹(9) 熊沢蕃山(3)
山崎闇斎(8) 佐藤剛斎(7) 浅見綱斎(7) 三宅尚斎(4) 若林彊斎(4) 貝原益軒(2) 朱舜水(1)
安東省庵(1) 伊藤仁斎(12) 伊藤東涯(9) 伊藤介亭(3)
卷坤 奥田三角(4) 北村篤所(1) 中江岷山(1) 篠崎金吾(1) 天素原(3) 中村楊斎(1) 毛利貞斎(1)
安積澹泊(1) 木下順庵(2) 新井白石(13) 雨森芳洲(2) 西山健甫(1) 金蘭斎(3) 三宅石庵(2)
物徂徠(25) 太宰春台(8) 服南郭(9) 服仲英(1) 平金華(4) 水秀才(1) 高蘭亭(8) 沢村琴所
(1) 岡白駒(1) 加嶋矩直(3) 梁田蛻巖(2) 宇士新(12) 片北海(2) 芥彦章(1) 中村深蔵(2)
高養浩(3) 並河五一(1) 並河天民(1) 林周文(1) 清君錦(3) 松崎観海(2) 瀧弥八(1) 石筑波
(4) 鶴土寧(1) 湯浅常山(2) 秋玉山(1) 劉龍門(1) 原公瑤(30)

右の通り、六十人、二百四十三条の性行逸話が著されているが、『先哲叢談』には、未収の人物も見える。うち、東条琴台編の『先哲叢談後編』に入っているのは中江岷山他七名、『同統編』には吉田素庵他七名、いずれにも含まれないのは、北村篤所他九名である。本文は、行状や墓碑銘を切りとって纏めた条から、『近世畸人伝』などの略伝や随筆を漢文化した

条と、体裁として『史氏備考』よりは『先哲叢談』版本に近づいてきている。具体的な引用は後にして、続けて天理図書館蔵『日本儒林談』について見ておく。

写本、大本三卷三冊。著者「北総 原善公道著」。巻末識語「是先哲叢談即原念祖齋稿本也／獲之殆二十有餘年前矣今裱背改／裝藏之架中 竹清主人（印）。藏書印「十文字文庫」「此君齋」「群庶軒印」。先に引いた文章で竹清氏は「首めのかた三巻ばかり」とその内容を記していたが、よく見ると三巻が同じ時期の稿本ではなく、二つに分ける必要があることに気付く。一覧できるように、表にしてみよう。人名・条数、それに当たる版本の巻と順序、及び版本における条数を比較し、並べてみる。

一冊目

人名	条数	版本の巻(順)・条数
伊藤東涯	15	四(二)・17
附奥田三角	附1	附八(三)・7
伊藤蘭岫	3	四(三)・3
米川操軒	3	四(四)・3
新井白石	14	五(六)・18
三宅石菴	2	五(九)・3
三宅観瀾	3	五(十)・4
物徂徠	29	六(一)・22
二冊目		
梁田蛻巖	5	六(四)・5
太宰春臺	21	六(七)・13

三宅觀瀾	三宅石菴	三宅尚齋	室鳩巢	新井白石	安積澹泊	森儼塾	淺見綱齋	佐藤直方	大高坂芝山	仲邨惕齋	貝原益軒	宇都宮遯菴	三冊目	宇士朗	宇士新	服仲英	服南郭	藤東壁
4	3	9	8	19	8	2	5	9	4	8	10	5		2	17	3	13	5
五 (十)	五 (九)	五 (八)	五 (七)	五 (六)	五 (五)	五 (四)	五 (三)	五 (二)	四 (十一)	四 (六)	四 (七)	四 (八)		七 (九)	七 (八)	六 (九)	六 (八)	七 (一)
• 4	• 3	• 10	• 7	• 18	• 8	• 2	• 6	• 9	• 4	• 8	• 11	• 5		• 3	• 10	• 3	• 16	• 7

一冊目の元表紙には、本文と同筆で「日本儒林談」の書名とともに一、二冊目の人名が墨書されている。これは、一冊目と二冊目が一つのまとまりをもって整理されたことを物語っている。あるいは、何かの心覚えであろうか。三冊目（以下、天理本Bとする）の巻頭には、目次題「儒林談巻之」の後、

後 貝原益軒 十（七を訂正）則

前 仲邨惕斎 八則

宇都宮遜菴 五則（この行、後から書き入れ）

大高坂芝山 四則

佐藤直方 九則

浅見綱斎 五則

森儼塾 二則

安積澹泊 八（六を訂正）則（この行、後から書き入れ）

新井白石 十六則

室鳩巢 八則

三宅尚斎 九則

三宅石菴 三則

三宅観瀾 二則

合七十三則

と、人物の順序や条数の訂正がなされた目次が載っている。天理本AとBに重なる人物が三名いることは、異なる時期に書かれた稿本であることを示している。更に、版本との順序や条数を比べると、Bの方がより版本に近いことが、読み取れ

る。では、実際どうなのか、先に紹介した東大本と合わせて見比べることにする。三種類すべてに登場する人物は、新井白石と三宅石庵の二人だけである。ここでは紙数の関係もあり、分量の少ない三宅石庵を取り上げる。かなり、筆削の加えられている文章もあるが、それも生かすような形で、訂正された箇所傍線をつけ、改めた後の文や新たな書き入れを「」内に記す。草稿らしい文字の重複なども見受けられるが、そのままの形を残す。句読点は本文のままである。

(一) 東大本

三宅石菴

○石菴與弟觀瀾偕耽學不修其生產遂窮困無儋石因盡鬻家具以償宿債餘金謂觀瀾曰是雖匱乏尚足支數年其志愈篤環堵之室雙几而拋共至忘寢食久之窮因如前則去來江戸游學者積年獨石菴復歸京師遂如大坂於是乎弟子雲集塵至聲普始播天下

(二) 天理本 A

三宅正名字實父號石菴又稱萬年平安人

○石菴與弟觀瀾偕耽學不修生產遂致窮困因盡鬻家具以得數金乃「少耽學不視家道產遂蕩盡乃斥賣家什以償宿債僅餘數金而償宿債以顧其餘則僅數金耳」謂「弟」觀瀾曰是雖匱乏「至此而」短褐蔬食足支數年其志愈篤「益」環堵之室雙几而拋「講習」共至忘寢食久之屢空倍于初則「於是相携」游學江戸居數年石菴獨歸于京師「尋」教授于大坂於是「時聲聞大起」弟子雲集相謀請「郷校」地于關東乃「則」許賜因構堂稱「建」懷德「堂衆皆使」石菴執牛耳「固辭不可終居其任」石菴逝後中井氏嗣之「至今」不衰云

○石菴「工」書有「又通和歌及俳諧而書則善」顏真卿體裁隻字人爭求之而質「朴」素未嘗押印其書 續近世畸人傳

(三) 天理本 B

三宅正名、字實父、號石菴、又號萬年、平安人

○石菴少耽学不視家道、由是産遂蕩盡、乃斥賣家什以償舊債、則所餘僅數金而已、謂弟觀瀾曰、「此」雖貧極、短褐蔬食可以支數年、鑽堅仰高之志愈厚、環堵之室雙几而講習、共至忘寢食、亡何屢空倍于前、於是兄弟相携游学「来」江戸「教授取給」居數年石菴獨帰京師、尋教授「至」大坂、時聲聞大「名翹然」起、弟子雲集、中井整菴等相謀請官建庠校、名懷德堂、衆皆推石菴主之、固辭不可、遂「領祭酒事」執牛耳、後中井氏嗣之、至今不衰

○石菴工書入顏真卿體裁、隻字人爭求之、而性質實朴素、其所書未嘗押「打」印、又通和歌及俳諧

○吾祖公曰、京師大坂有作神主鬻者、視之則伊川製、而以此邦曲尺六寸四分弱為周尺一尺、初教其作之、蓋山崎闇齋中邨惕齋三宅石菴等所為也、而何以知周一尺當此邦六寸四分也、丘瓊山家禮神主尺式云、周尺比今鈔尺六寸四分弱、其所拋蓋是也、然明鈔尺無異此邦曲尺、亦何以為證也、（註）儒所為不可必信也、夫尺寸誤考、姑置之、至其使作神主以鬻之、自非此輩以禮法為任、其誰「孰能」為之「この条頭に刪」

(四) 版本

三宅正名。字實父。號石菴。又號萬年。平安人。

○石菴少耽学不視家道。由是産遂蕩盡。乃斥賣家什以償舊債。則所餘僅數金耳。謂弟觀瀾曰。今雖貧極。短褐蔬食。可以支數年。鑽堅之志愈厚。環堵之室對几而講習。共至忘寢食。亡何窮亦極矣。於是兄弟相携来江戸。教授取給。居數年。石菴獨帰京師。尋至大坂。時名翹然起。弟子雲集。中井整菴等。相謀請諸官。建庠校。名懷德堂。衆皆推石菴主之。固辭不可。遂領祭酒事。後中井氏嗣之。至今不衰。

○石菴工書。頗得顏法。隻字人爭求之。而資質朴素。其所書未嘗款印。又通倭歌及俳諧。

○香川太冲曰。世呼石菴為鶴学問。此謂其首朱子。尾陽明。而聲似仁齋也。

最後に版本の条を付し、四種類を並べた。内容は、天理本Aの末尾にあるように、それぞれの一、二条ついては、『續近世畸人傳』注12（寛政十年刊）巻二から採ったもの。天理本Bの第三条は、『過庭紀談』注13（天保五年刊）巻五に、版本の第三条は

『文會雜記』^{註14}卷三下に拠っている。このように、並べてみると、稿本の順が、東大本↓天理本A↓天理本Bと版本に近づいて流れていることが、よくわかるはずである。そして、この流れは、二種類にしかな名前が登場しない人物で比べても当てはまるのである（例えば、三宅観瀾など）。

では、改稿に際して、何か顕著な傾向はないのだろうか。当然、考えられることとしては、公に憚られる事柄への対処であろう。例えば、天理本Aの太宰春台の第四条において「神戸侯」が「某侯」に、第五条では「八田侯」が「某侯」に訂正され、この書換えはそのまゝ版本で生かされている。同じ春台の第六条には、「学非記誦詞章、而為有用于世、是春臺素願也。嘗因沼田侯、上封事言災異不報」とある。沼田侯に対する遠慮か、己が願いの報いられない春台への同情か、「刪」と付されて、版本にはない。また、天理本Bの新井白石の第六条は、幸いに時を得た白石であったが、後に落職閑居の身となり著したのが『折燒柴』であり、「則後嗣秘不妄示人」[外人莫得見]、然此書無翼而飛、謄寫較廣、布于世者「甚」多」と結んでいる。門外不出とされた著述が流布していることを思案してか。あるいは、白石晩年の不遇を思い遣ったのだろうか。いづれにしても、この条も版本では削除されている。登場人物にとつての暗部や批判的内容は、どうやら意識的に削られているように見える。前掲の三宅石庵、天理本Bの第三条も、その一例と言えるだろう。双桂は、石庵等の定めた尺度を根拠が曖昧だとして否定しているのである（『過庭紀談』では徂徠の考証を支持）。対して、替わりに加えられた一見批判的に読める版本第三条の「鶴学問」の評価は、学派に拘泥しない寛容な学問という見方をもってすれば、まさしく折衷学につながるものだとできよう。

また「先哲叢談凡例」で述べるように、疑わしい事柄については、検討を施し除いていったようだ。天理本Bには、三宅石庵・観瀾兄弟の父親についての紙片が付してあり「^{イナレ}庵ハ三宅道乙ノ子弟観瀾次石屏ミナ儒者道乙ノ子ナル」載セラルヘキカ」と記してある。だが、その側には後に小さな字で「道乙ノ説疑ハシ観瀾ノ墓碣ニ父道悦トアリ又日本詩史ニテ見レバ自ラ別人ニ似タリ」と書かれている。道乙は、三宅葦革齋で、この兄弟の親ではない。また、弟は佩章が正しく、石屏こと三宅金谷も間違いである。勿論、版本には採られていない。

天理本Bの佐藤直方では、事実の訂正を行った条も見える。それは、麻布琉璃光寺への掃苔が、先には失敗に終わって見出しを出せないと書いていたが、後には墓を探し出して碑文を載せている条である。版本の第七条は、訂正した形をそのまま伝えてある。天理本Aは、典拠が処々に記載してあるが、「口碑」とされている箇所もあり、『先哲叢談』が最も古い典拠となる条もあるようだ。

他に、一つの条が、詳しくいくつかの条に分かれて書かれる場合もある。代表的なのは、奥田三角の条である。東大本では、典拠を『續近世畸人傳』卷二に求め、藤堂家四君に仕えた事・号三角について・壽碯の自撰・父と師への服喪の四条から成っているが、天理本Aでは、伊藤東涯の付たりとして、一条しかない。だが、その内容は、

奥田士亨、字嘉甫、號蘭汀、又稱三角、伊勢人。藤堂津疾儒臣也。三角師事東涯、厚信其說。門人嘗謂曰、先生願為吾黨作六經注解。三角曰、吾先師著書盡之、何添蛇足為。其奉之如此。三角歷仕津四君、皆寵信。致仕後猶常侍君。君呼先生而不名。三角本其亭號、自作之記。後好物三角、書机書櫃其他坐右文器、皆制以三角。年七十七建壽碯自撰銘序。
(句読点、筆者)

と、多くの逸話を含んでいる。そして、版本では、卷之八に独立した一個の人物として、七条が載る。版本は『三角集』（宝曆七年跋）を使った三条が増えているが、それ以外の四条は、東大本の内容を膨らませたものに過ぎない。三角をどのように扱うかで、一条に纏めたり、分けてみたりと草稿の段階での試行錯誤が窺える。文字の異同は、数限りないほどにあり、念齋の真面目な取り組みが、滲み出ているようである。

三

さて、これらの稿本の他にも『先哲叢談』刊行後に編まれたものに、『先哲叢談補遺彙材』（都立中央図書館蔵、以下『彙材』と略す）がある。写本、半紙本一冊。著者名は記されていないが、筆跡は天理本に同じ。本文中、松永昌三の墓に触れ、「尺五堂恭儉居士墓 在洛下本國寺／明曆三丁酉年、六月二日卒」と記した箇所の頭注に「予力生卒表昌三卒明／曆

元年ニ記ス糸ス可シ」とある。「生卒表」は、念斎の著述として『先哲像傳』にあつた『先哲生卒表』のことであろう。とすれば、『先哲叢談』刊行後に念斎が、今までの記述の訂正や補遺を考えて残したものであると言える。『先哲叢談』版本では、昌三の忌日を明暦元年か同三年か不明と書いていたが、その後の情報として、三年の正しいことがわかつたということだろう。また、貝原益軒の事跡についても、「佗日先哲叢談貝原ノ補談ヲ作ラハ此ノ引書一覽ス可シ」として、『自娛集』所収の九編の文と『春台集』『南郭集』『日本詩史』『畸人傳』を掲げている。そして、これら引書の情報源を『楓軒史料』としている。『楓軒史料』は、水戸藩士小宮山楓軒の輯めた史料集で、念斎との交友については、既に丸山季夫氏に指摘がある。^{註5} 楓軒の書留『懷寶日札』^{註6}にも、

○會津侯正之ノ問ニ答ヘテ、山崎闇齋三楽アリト云ルコトアリ。先哲叢談ニ見ユ。然ルニ、此ハ槌與五衛門ト云モノ、對ト、常山紀談ニアリ、原三衛門ヘ可申遣候事。

(十一 文政元年)

と、気づいた記事の誤りを正そうとする態度が見え、親密な関係が窺える。『彙材』には、『楓軒史料』を引いている記事が、他にもあり、先の松永昌三の墓の同書によつて得たものであつた。その他には、立原翠軒の『文苑雜艸』『郷黨遺聞』、あるいは『挙知録』等も、『彙材』の引書として、拾うことができる。

おわりに

『先哲叢談』の仕事が認められた念斎は、林述斎によつて、国初事跡の編集を命じられたという。^{註7} 時代はまさに述斎を中心に据えての、官撰編纂の季節を迎えていた。念斎にとっては、自分の力が発揮できる、またとない機会が訪れたのである。だが、実際に念斎が、何という書物にどんな形で参画したのか、まったくわからない。あるいは、何もする暇がなかつたのかもしれない。登用された念斎は、やがて病に倒れ、数カ月後、葉効なく没してしまふのである。

安永三年（一七七四）辛亥 一歳

六月二十九日 原敬仲の子として江戸下谷に生まれる。

寛政二年（一七九〇）庚戌 十七歳

この年 七絶「偶成」〔『念祖齋遺稿』卷一、以下巻数のみを記す〕

寛政四年（一七九二）壬子 十九歳

この年 五絶「臥病」〔卷二〕

寛政五年（一七九三）癸丑 二十歳

八月十一日 父敬仲没、享年四十六（山本北山撰「原敬仲墓表記」）

父の後を嗣いで御徒士組に入る。

九月 七絶「去歳与大人同詠菊飲今年大人没矣菊也開吁嗟哀哉」〔卷二〕

寛政六年（一七九四）甲寅 二十一歳

六月 「温泉小言跋」〔卷六〕

九月 『温泉考』（原双桂著・一冊）序刊

寛政八年（一七九六）丙辰 二十三歳

元旦 「淡交録序」〔卷六〕

三月望 「容膝亭記」〔卷七〕

六月 「松説」〔卷八〕

十一月朔 「題遺稿後」〔卷六〕

寛政九年（一七九七）丁巳 二十四歳

三月 「奉送母大人帰省古河序」〔卷十〕

五月端午 「與平生」(卷五)

六月 「伍子胥論」(卷十)

閏七月 「吊高麗松溪伊藤明行序并詩」(卷八)

八月 「送酒井武仲婦信濃序」(卷八)

九月 「項羽論」(卷十二)

十月 「賞殘菊序」(卷八)

十一月 「子產作丘賦論」(卷十一)

寬政十年(一七九八) 戊午 二十五歲

正月晦日 「送小野逢吉婦陸奧序」(卷九)

正月 「與大浦凶南書」(卷四)、「與恩田大雅書」(卷四)

三月 「送山田元凱之甲斐序」(卷九)

四月 「紀兔為翁討狸報讐事」(卷十二)

五月 「紀桃太郎討鬼国事」(卷十二)

七月 「送石井伯温婦秋田序」(卷十)

寬政十一年(一七九九) 己未 二十六歲

六月 「性說」(卷十三)

七月 「與恩田大雅書」(卷四)、「奉送北山山本先生遊下野温泉序」(卷八)

十月 「滑河碑銘并序」(卷八)

十二月 「三友亭記」(卷七)、「伊尹五就湯五就桀論」(卷十一)

寬政十二年(一八〇〇) 庚申 二十七歲

二月十日 「送朝川五鼎之長崎序」(卷九)

六月 「春日宴奚疑塾序」(卷九)

冬至 「刻家書不動金記曆序」(卷七)

享和元年(一八〇一)辛酉 二十八歳

五月 「與恩田大雅」(卷五)

八月二十日 「送大繩生帰秋田序」(卷十)

享和三年(一八〇三)癸亥 三十歳

十二月下澣 「顯祖考双桂先生遺事」(卷十四・十五)

文化二年(一八〇五)乙丑 三十二歳

中秋 「鶴城手簡序」(卷十二)

十二月 「賢相野史序」(内閣文庫蔵『賢相野史』・卷六)

文化三年(一八〇六)丙寅 三十三歳

八月下澣 「桂館遺事序」(卷十四)

文化五年(一八〇八)戊辰 三十五歳

五月 『許我志』に題す(鷹見家歴史資料目録)

文化七年(一八一〇)庚午 三十七歳

八月 「双桂集序」(卷六)

『双桂集』(原双桂著・七卷三冊)を校訂、刊。

文化九年(一八一二)壬申 三十九歳

秋 「心月軒稿序」(卷六)

文化十年（一八一三） 癸酉 四十歳

六月 『許我志』に題す（鷹見家歴史資料目録）

文化十三年（一八一六） 丙子 四十三歳

八月 「先哲叢談凡例」（巻七）

九月 『先哲叢談』八巻四冊刻

文化十四年（一八一七） 丁丑 四十四歳

四月朔 「墓所一覽跋」（巻六）

四月 志賀理齋の四男徳斎、養子となる。

五月 『桂館漫筆・同野乗』（原双桂著・一冊）を編刊

十一月 官命により『先哲叢談』を献上（善庵「墓誌銘」）

十二月 白金五枚を賜る（同右）

文政元年（一八一八） 戊寅 四十五歳

十月上浣 「宋雲詩集序」（巻七）

十二月三日 「宋雲詩集序」（巻六）

十二月 『江戸当時 諸家人名録』に学者として「下谷三味線堀 原三右衛門」と載る。

この年 「瓦杯之記」（巻十二）

文政二年（一八一九） 己卯 四十六歳

正月 「畜猿説」（巻八）

三月 「先民伝序」（巻六）

五月 『先民伝』（盧千里著・二巻二冊）を校訂、刻。

六月二十二日 娘茂世没

文政三年（一八二〇）庚辰 四十七歳

三月十九日 没す、駒込洞泉寺に葬られる。

文政六年（一八二三）癸未

正月下浣 徳斎「念祖斎遺稿序」を撰す。

文政九年（一八二六）丙戌

四月上澣 佐藤一斎「原公道墓銘」を撰す。

天保五年（一八三四）甲午

四月 『過庭紀談』（原双桂著・五卷五冊）、徳斎校訂、刊。

注

1 源了圓・前田勉訳註『先哲叢談』（平成六年）。解説中、原念斎や『日本儒林談』についても触れているが、本論はその記述に重複しないよう心懸けた。

2 「適（タノシム）と訓ず。普通読み馴れない訓で斯んなのを特訓と言っておかう」（林羅山）や「その羽織を質に入れて金を造ることである。親心のよく出ている文章である。」（伊藤仁斎）などのコメントが附されている。

3 日本書誌学大系23（2）（昭和五十七年、青裳堂）

4 原徳斎及び念斎没後の原家については、市川任三氏「『妙めを奇談』と志賀理斎・原徳斎」（『立正大学教養部紀要』十二号・昭和五十四年発行）に詳しい。

5 『恒庵文稿』卷三所収「念祖斎記」。

6 吉田篁墩著『近聞寓筆』（文政九年序）のことか。但し、念斎校訂の跡は見えない。

- 7 「讀先哲叢談七首」の七首目・『遠思樓詩鈔』（天保九年刊）巻下。
- 8 注5文中には「公瑤先生博考群書、折中經義、別為一説、予因觀其帳秘、則有辨道德性情心禮樂、非朱元晦、疑伊藤原佐、詰物茂卿之言照然」とある。
- 9 国立国会図書館蔵。写本、半紙本十五卷五冊。原徳齋編。
- 10 日本儒林叢書七卷（昭和五十三年、鳳出版）所収。
- 11 都立中央図書館蔵。版本、半紙本六卷附一卷三冊。文化七年刊、念祖齋蔵梓。
- 12 宗政五十緒校注『近世崎人伝・続近世崎人伝』（昭和四十七年、平凡社東洋文庫）
- 13 日本随筆大成〈新版〉一期九（昭和五十年、吉川弘文館）所収。
- 14 日本随筆大成〈新版〉一期十四（昭和五十年、吉川弘文館）所収。
- 15 「竹齋手簡に見えた原念齋」・『国学史上の人々』（昭和五十四年）
- 16 『随筆百花苑』巻三（昭和五十五年、中央公論社）所収。
- 17 佐藤一斎撰「原公道墓銘」（『先哲像傳』所収）に拠る。『事実文編』や『愛日楼文』所収の文章にはない。

附記 本稿を成すに当たって、貴重な資料の閲覧・複写を許可して下さった各所蔵機関に深く御礼申し上げます。